わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 88

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

変わる医療の現場

高齢に差しかかった中年男性が、突然意識を失い救急外来に搬送された。呼べばかろうじて反応があるが、脳に何らかの異常をきたしたのはひとめで明らか。家族はただオロオロするばかりだ。ひととおりの診察を終えた医者が「どうしますか？」と家族に尋ねた。はじめ、何を聞かれているのかわからず、その意味を理解するのには改めての説明が必要だった。つまり、このまま放っておけば、確実に命を落としてしまう。治療を施せば、今なら命は助かる。しかし、その後どうなるかはわからないということだ。寝たきりになるのか麻痺が残るか…。

「どうしますか？」は、「それでも命を助ける治療をしますか？」という意味だったのだ。

仰天した家族は、「当たり前です、お願いします！」と懇願した―。

これは実話である。さて、この出来事、あなたならどうとらえますか。

私はこの話を人づてに聞いたとき、確実に「医療は変わった」と思った。とにかく、命を助けるためだけにあったあらゆる法律、ルール、人々の意識のあり方がいつのまにか大きく変貌を遂げたのを感じた。

くだんの家族は、「とんでもない医者だ」と憤るばかりだが、もしかしたらこの医者は親切なのかもしれない。

脳にアタックを受けた場合、発見が早く運がよければ意識は改善し、リハビリによって機能回復も期待できる。しかし、運が悪ければ意識は混濁し、あるいは明瞭であってもかなりの部分で麻痺が残り、家族の献身的な介護が必要となる。その可能性も非常に高い。なまじ命を助けても、その後社会復帰が果たせなければ、なぜあのとき死なせてくれなかったのかと訴える患者や家族もいることだろう。この医者はそれに似た経験があるのかもしれない。

多くの人は、死は確実に平等にやってくるのに、ほとんど意識をせずに暮らしているから、突然の発作や病気にまずは驚きうろたえる。毎日の連続性が断たれることを恐れ、何とか死なないでくれと願う。これは当然である。また、はたから見てると生きているのか死んでいるのかわからない状態であっても、どんな姿でも生きていてほしいと願う家族も多い。そんな、デリケートで多彩な人間の生と死、ややこしい家族関係に関わりを持たなくてはいけない今の医療の現場は本当に大変だ。

昭和から平成にかけて飛躍的に寿命を伸ばした日本の医療は、ここにきて行き先の見えない船が海のど真ん中で漂っているかのようだ。

生きているとはどういうことなのか。ただ心臓が動き呼吸をしているだけでも生きているといえるのか。生と死の境目は誰が決めるのか。長寿の国になったことを国民はどう考えているのだろうか…。残念ながら、医療にはその答えを示す術がない。今までもそうだったしこれからもそうだ。それが現実だということを国民はそろそろ気がつく必要がある。

この男性が発作を起こして3ヶ月以上になる。意識は戻っていない。とんでもない医者だと怒りをぶちまけた家族は今何を思うだろう。是非とも教えてほしい。

イラスト・三浦義雄